
混同する狂気

VV

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

混同する狂気

【Nコード】

N9299G

【作者名】

V V

【あらすじ】

人には生まれ出でたときからの欲望がある。限りなくダークな欲望。殺人欲、強奪欲、支配欲。それらは理性という名の鎖で縛り付けられ、基本表に出ない。表に出ても、上手にそれを消化する。できなかつた人間の末路は 犯罪者。ただそれは、独りでに成長することもあれば、周りの影響をうけて成長することもある。特に

同類からの誘惑の影響は大きい。狂気が狂気を呼び、混同し、その先にあるのは？これは、混ざり合った狂気の中苦しむ、少年の物語。

O / o v e r l o o k ・ f a l l i n g

O / o v e r l o o k ・ f a l l i n g

それは鮮烈な一撃だった。

手に握ったナイフで、彼を殺そうと前かがみになった俺を後退させるに十分な、肩への発砲。

数メートル先から狙いをつける、逃れられない呪いのような鉛の塊。

ただそれは衝撃で後方へ後ずさりする、なんて致命傷でもなんでもない無駄な一撃だった。

俺は目の前の彼の不運を嘆きながらも、体勢を整えた。

、はずだった。

「あれ？」

おかしい。さっきまで目の前に広がっていた灰色コンクリの屋上風景はどこへやら。今は、満月の浮かぶ優雅な夜空が俺の目の前に広がっている。

……、っと少し待て。

思いつきりハイにぶっ飛んでいた頭を冷静に、フル回転させる。

必要は特になく、

「俺、落ちてるのか」

自分でも驚くぐらいあっさりと、自分の置かれている状況を把握した。どうやら、先の銃撃の反動で足場を踏み外したらしい。

ということは、俺は現在進行形でビルの六階から地面向かってに脳天から落ちていているということ。

下手なアクション映画とかでは主人公が突発的に閃いたアイデアで生き残るのだが、そんな知恵もなく主人公ですらない俺にそんな芸当は出来ない。

ってことで脳天からの落下は免れなくて、後数秒後に俺は死ぬ。

……いざ死に直面してみるとなんだか呆気なく感じられる。こんななら、我慢していたあんなことやこんなこと、その他諸々のことをやっておけば良かったと思う。

そう考えたときに、自分は誰かに謝らなければならぬということに気づいた。誰になのかはよく分からない。

とても大切なヒトだった気がするのだが、名前が思い出せれない。

それ以前に、何でこんなことになったのだろうか。あの人に追いかけられた原因は？ 俺がこんなに血だらけなのはなぜ？

何も分からない。ただ空は遠くなっていき、。それとは逆に地面への距離は近づいている。

それでも俺は焦らず、ゆっくりと考える。

そして最後の最後。死ぬ間際になって思い出した。手に握っていた、赤く塗られたナイフを見て思い出した。

俺は、もう失われた儂い夢のためにこれを握ったんだ。

意味はないと。帰ってこないと分かっても握った。

救いたかった。救えないと、不可能なんだと分かっていたても救いたかった。

それが俺の願いだった。

ただ、滑稽な事に、俺は歪を抱えて崩れ落ちた自分を支えてくれていたヒトを、これで殺した。

裏切られたと、意味の分からない妄想を抱いて。信じることさえしなかった。

ずっと笑顔を向けてくれていたのに。ずっと傍らにいてくれていたのに。

貰っていたのに、俺は与えているんだと勘違いして罵倒したんだ ツ！

最後の最後でそのことに気づいて、すっごく自分の事が嫌いになっ

そして 俺は死んだのだった。

1 / opening・peaceful:1

1 / opening・peaceful

炎天下の七月。真夏の太陽は行きかう人々の活動意欲を削ぎ、ジリジリと熱せられたコンクリートの地面はお好み焼き屋の鉄板みたいな高温を放っている。

夏特有の纏わりつくような湿気は身体中を覆い、汗にぬれたシャツは肌へ密着し地味な不快感を人々に与える。

夏というのは半数の人々に「運動しよう!」とか思わせる季節なのだが、もう半数の人々には「動きたくない」と思わせる好みの分かれる季節。

そんな直射日光の雨が降り注ぐ十字路の歩道を、少年 戸宮有我は歩いていった。

髪はジャパニーズスタンダードの黒色で、瞳の色は木製家具のようなブラウン。体系は中肉中背という、ごく普通の高校男子。

そんな彼の横を通り過ぎていくバス。車内には戸宮と同年代と思われる少年少女が、これまた戸宮と同じ高校の制服を着用している。

戸宮の家から学校までの間にバス停はある。それも徒歩一分という短い時間で到着できるバス停。バスに乗り遅れることなど到底考えらない。

しかし戸宮有我は歩いている、この茹だるような暑さの中を。

「はあー。後悔してる。平均気温三十度を舐めていた自分が真に恥ずかしいです。……たぶん、俺学校に着くまでに死ぬわ」

遠慮なく降り注ぐ日光を身に浴び、汗だくになりながらも戸宮はこんなことを呟く。

なぜこんな事になったかというと、それは一時間十分前の戸宮有我自身の決断に起因する。

「今日は徒歩で通学するか！」

別に意味もなくこんな馬鹿げた事を言い出したわけではなかった。時期は七月。学生たちがにわか騒ぎ始める夏休み前。

高校生ともなれば活動範囲も広がり、夏休みというのは散財の時期。お財布事情が厳しくなる四十日間。

戸宮の学校は校則でバイトを禁止しており、戸宮にとって毎月一万円のお小遣いは備えであり生命線であり、とつても大事にしなければならぬ。

……、はずだったのだが。

久しく出会った中学の旧友。仲のよい友人の誕生日パーティーなど、予想外の出費イベントに財布の紐は緩みまくりで野口英世は出て行くばかり。

そんなこんなで七月八日現時点で残金二千円也。

「……まずい」

戸宮がほとんど空っぽになった殺風景な自らの財布を見て発した一言はそれだった。

……とにかく出費を減らすつきゃない！

そう決意した戸宮は、衝動買いをやめ友の誘いは大事なもので外出来るだけ断り、少しずつ削れる出費を削ってきた。

そんな是が非でも出費を抑えたい状態で見ただけ天気予報。連日、平均気温は三十五度越えを記録していたのだが……今日びは珍しく三十度。

五度程度の気温の違いなど実際問題大したことではない。それは五倍カレーと十倍カレーを比べるようなもので、少々違っていても暑いのに変わりはない。

それなのに徒歩通学するという決断をした戸宮有我。

その明らかに間違いな決断が原因で、戸宮は望んでもいないのに汗だくウォーキングを満喫するハメになったのだ。

家から学校までは直線距離で約二キロ。今日は歩くのだからと時

間は余裕たっぷりにとつてあるので大丈夫なのだが、体力が持つかどうかが問題。

そんな虫の息の体力を補給するために、時折目につく自動販売機でよく麦茶を代表とする冷えた飲み物を買ってもいいのだが、それではバス代をケチつた意味があまりなくなってしまう。

そんなこんなで戸宮有我は若干（というよりほぼ八割）自業自得な登校をしているのであった。

「こんな状況になるとよく分かる。たかが数百円で乗れるバスのありがたみが」

そう呟きながらそのたつた数百円を節約するためにこんな馬鹿なことをしているのはどこのどいつなんだ、と戸宮は思う。

と言つても希望がないわけではなく、残りの道のりは全体の約半分。その事に僅かにだが希望を持ちながら彼は歩き続けていた。

大きく開かれた窓。そこから見える景色はビルや住宅街が立ち並び、お世辞でも美しいとはいえないモノだったが、それでも壮観で戸宮の心に少しばかり余裕を持たせた。

ここは戸宮有我の目的地。遠峯市立横波高等学校。全校生徒八百九十六人の何の変哲もない学校。

そのこの2年D組窓際の列前から三番目の机に戸宮は突っ伏していた。

右手にはついに買ってしまったペットボトルの水。そのおかげで、戸宮有我は今ここに生存することができている。

教室には楽しそうに会話をする同級生たちの姿。皆、ホームルームまでのわずかな時間を楽しそうに過ごしている。

それに比べて自分は、と戸宮は思う。俗に言う死んだ魚のような目に、両手足は暖簾のように垂れ下がり。一日の学校生活始まりの朝に、重労働から開放された作業員のような表情を浮かべる自分。

それらが全て自業自得だと分かっている、

「不幸だ。ものすつごい不幸だ」

と、戸宮は咳かすにはいられないのであった。

そんな状態だったからだろう。「戸宮センパイ！」と明らかに戸宮を呼んでる教室の外からの声に気づかない。

何度呼んでも反応しない戸宮にムカツときたのか、声の主　女子生徒は眉間に皺を寄せる。

何時までも女子生徒が教室の外から叫んでいたのは戸宮自身が女子生徒に「俺を呼ぶときは教室に入らないようにしてくれよ！」と何度も行っていたからだ、肝心の本人は呼びかけに応じない。

怒りと共に呆れ果てた女子生徒は、約束を破り教室の中へ歩いていき　戸宮の机の前で足を止める。

「はっ？」

突然机の前に立ち止まった誰か。戸宮はそれが自分が蒸し続けた人物だとは思ってもせず、その誰かを確認しようと顔を上げ、

「センパイのバカ！」

右方向から襲ってきた平手に、力いっぱい顔を叩かれるのであった。

「あのなー、人を呼ぶための手段が突然の平手打ちつてのは野蛮すぎて、どうかと思うぞ、俺は」

「何いつてるんですか！ 何度呼んでも反応をよこさなかったのは、センパイじゃないですか！」

「呼んでたの？」

戸宮が気まずそうにそう尋ねると、女子生徒は声を荒げながら「そうじゃなきゃこんな事言いません！」と答える。視線には怒気が籠っており、そういうのは慣れている戸宮でも少し怖気づく。

それを聞いた戸宮は内心「まずったなー」と呟く。

一限と二限の行間休み。そんな朝っぱらから痴話喧嘩を繰り広げる二人組みがいるのは、一階の階段下。比較的人の往来が少ない場所。

なぜそんな場所を選ぶのかというと、女子生徒が戸宮の彼女であり、夏休みの楽しみ方を左右する『彼女』という単語に世の男子生徒が敏感になる時期にそんな関係の二人が楽しそうに話していると、男のほうは決まって同級生からの突き刺さるような視線に晒されるからだ。

だが戸宮の場合それだけではなく、付き合っている相手が一年生随一の美少女だというのも理由に入る。

女子生徒の名前は綾瀬美子都。ツヤのある短髪と、キューティクルな瞳がチャームポイントな（戸宮の友人談）、何度も言うが戸宮の彼女である。

「だから悪かった。考え事してて気がつかなかったんだって」

『暑くてバテていた』が『考え事をしていた』に変わっているのは、戸宮も少しはいいカツコしたい願望があるからだ。

「センパイ！ それ嘘です。センパイが朝っぱらから考え事なんてありえません」

「あー、はいはい。今度おいしい店連れて行ってやるから、それでいいだろ」

「んっ………分かってるなら良いです。おいしい店ですよ!」
念を押した彼女の言葉に「はいはい」と答えながら、戸宮は頭の中で街の地図を広げ『おいしい店』というのを探す。

「じゃあセンパイ。また放課後!」

「ああ、じゃな」

手を振りながら自分の教室へと走って帰っていく美子都を見届けながら、内心「『おいしい店』なんて知らねーぞ、俺」と呟く戸宮。この後、彼が友人たちの「美子都ちゃんと行くんだろ!」という追求を避けながら『おいしい店』情報を手にしたのは言うまでもない。

一日の気温が最高点に達する昼。学生たちは午前中の勉強を終え、休養の時間に入っている。

友達とお弁当を食べるお決まりの光景もあれば、食堂でわいわい騒ぎながら食事を取る微笑ましい光景もある。

ただ 肝心の戸宮有我はこの暑苦しい中、太陽からの日光を直に浴びる屋上にいた。

「先輩。あの、なんでこのクソ暑い日に屋上で昼食べるんですか？ さっきも言ったように、俺地獄の登下校を越えてきたんで暑いのはもう懲り懲りなんですけど」

言って戸宮は気だるそう（別にサンドイッチのせいではなく暑さのせい）に一口目のサンドイッチを頬張る。

「フン。これぐらいで暑いじゃなんだと言ってるところを見ると、普段は部活も行かずにダラダラしてるんだろ」

戸宮は自らが『先輩』と呼ぶ男性にそう指摘され、「うー」と唸り声を上げる。

まさしくその通りで、戸宮は一般的に帰宅部と呼ばれる部類に当てはまる。汗水流して青春を過ごしている学生を尻目に家に帰っているのだ。

それはそうと、この妙に観察眼の鋭い男性は黒峰藤吾。身長は普通に180センチを超える長身。それに加えこんがりと焼けた肌にかッターシャツの上からでも分かる筋肉。そして横波高校空手部主将という経歴を持つ、とにかくとんでもないセンパイなのである。

彼と戸宮の出会いは一年前。当時何かとケンカっ早かった戸宮が、三年の不良グループに噛み付き、色々あった拳句集団リンチにあっていたところを藤吾が助けたという漫画みたいな出会い。

だがそれ以上に漫画みたいだったのは藤吾の強さで、十人程いた三年生を二年生の彼が赤子の手を捻るかのように倒してしまったの

だ。

その出来事があってからは戸宮もあまりケンカをしないようになり、藤吾はそんなダメ学生を絵に描いたような戸宮が気に入ったらしく、こうして昼食を一緒に食べる仲にまでなった。

ただ戸宮がケンカをしなくなったのは単に黒峰と仲良くなったためなのだが。

「まあお前が部活をしてる、してないにまで文句を言うつもりはないけどな、他人の昼食を食べるような憩いの場所にいちやもんをつけるのは感心しないぞ俺は。嫌なら強制はしないんだから、綾瀬とでも食べればいい。お前と一緒に食べると言えば、喜んであの子はご一緒しますって言うだろう?」

学校内の生徒でただ一人綾瀬のことを羨まない藤吾の口からその話が出たことにちよつと驚きつつ、戸宮は質問に答えを返す。

「あいつにだってあいつの交友関係がありますし。一匹狼の先輩には分からないかもしれませんが結構昼食って交友関係を広げる場なんですよ」

「……じゃあお前はどうかんだ。最近俺としか昼食食べてないが」「俺は大丈夫。それ以外のところでフォローしてますから」

そのせいで今朝の惨劇は引き起こされたんだけどな、と一人心のうちで呟く戸宮。

藤吾は少し感心した様子で「ふうん」と頷き「そういうところが良かったのかな」と意味不明なことを言い出す。

「良かったって何がですか?」

「え　いや綾瀬のことだよ。何でお前みたいなのにあんな優しい子が惚れ込んでるのかと思ってたんだけどな、そういう優しいところが良かったのかなって。　　なんたって、カツアゲが許せなくて上級生に突っかかって行くんだからな、お前」

藤吾は少し嘲弄を含んだ笑みを浮かべながらトミヤに目を向ける。「なんですか、そのバカにした目は。人助けをして何が悪いんですか。別に勝てると思って行ったわけじゃないですし、むしろ負け前

提だった面だつてあるんですから。そういう自己犠牲な所を褒めて
もらうならまだしも、バカにするなんて先輩も堕ちるとこまで堕ち
ましたか」

「言うようになったな、お前。俺はそういう青臭いの、嫌
いじゃないぞ」

そう言つて藤吾は自分より十センチほど低い戸宮の頭をワシヤワ
シヤと撫でて、それから自分の持つてきた焼きそばパンの包みに手
をかける。

戸宮は餓鬼っぽく扱われたことに不快感を露にするも、うれしそ
うに口の端が笑っていた。

時は放課後。場所は学校の廊下。それも一階の昇降口付近なので、用事があつて今帰ろうとしている生徒以外の人影はない。

そんな空虚な空間にポツンと人が一人立っていた。紅の夕日を身に浴びながら 戸宮有我は立っていた。

窓から差し込む赤い光は廊下の壁と言う壁に反射し、見渡す限りを紅く染める。

その風景が少しきれいに感じられて、夕日と組み合わせればどんな物でも美しくなるのかと少しばかり戸宮は考えた。

先述のとおり戸宮は今昇降口付近にいる。だが別に家に帰ろうとしているわけではない。それを示すかのように荷物は何もなく、走れば結構速く走れそうなほど軽装である。

「下校開始時刻まであと十分程度か……あつー、何しようかな」

戸宮は美子都を待っている。彼女は帰宅部である戸宮とは違い、総合音楽部に所属している。総合音楽部というのは、吹奏楽部、管弦楽部、室内楽部などを一括したもので、小分けにされる部費をちよつとでもいいから削減しようとした結果、誕生したと言うのは生徒会にいる知り合いから戸宮が直接聞いた話だ。

さて、そういった学校教育の裏の事情から話を戻すと、そんな総合音楽部の有望な新人が彼女、綾瀬美子都なのだ。

戸宮は彼女とは違う中学校に通っていたため、彼女が昔からその分野に秀でていたのかは分からない。なんせまだ会って二ヶ月が経つか経たないかなのだから。

そう考えて、戸宮は彼女とまだ一ヶ月程度しか付き合っていないことに気づく。初対面が二ヶ月前で告白にOKサインを出したのが一ヶ月前。

それなのに、何故か彼女に長年付き添った幼馴染のような感覚を抱いていた。

……戸宮にとって恋人関係と言うのは何も彼女が初めてではない。戸宮は中学三年生のとき、いかにも今時という風貌の同級生に告白され付き合ったことがある。戸宮自身も少しばかり惹かれていた、元気でよく喋る女子。

だがそれは幻想だったのか。付き合ってみると人の悪口を四六時中と言つてもいいほど愚痴り、理解できない場面で大爆笑する。

これが近づいて初めて分かる真実つてやつか、と戸宮はその時思つた。

率直に言えば嫌気を感じていた。いつ別れようかも、別れの言葉も考えていた。ただ自分に合うといつても笑顔になる彼女を見ると、その言葉が出てこなかった。

しかし、いつの世も恋愛の終わりは意外なところから。戸宮はその彼女に「嫌いになった」の一言でフラれた。

戸宮も男だ。もう終わらしたかった、嫌いになつていたと言つても、やっぱり面と向かつてそう言われてみると傷ついた。

それから一年。女性に懲りていた戸宮は告白されるたびに断った。本音を言うなら面倒だからだが、「ほかに好きな人がいるから」と嘘を付いて。

中には自分のフレンドネットワークを駆使して一体戸宮君が好きなのは誰？ と探している奴もいた。

だがその努力は徒労に過ぎない。元々戸宮が好きな女性などその時点ではいなかったのだから。

それからまた一年。 戸宮有我は綾瀬美子都と出会う。

そこまで考えて……自分と彼女の初対面はいつだったのかと、気になつて戸宮は何となく考え出した。

頭の中で遡っていく時間。彼女との初デート、初めて家に招かれたとき、そういつた彼女との様々な思い出が交差し、目的の場面を思い出したところで、

「おう、戸宮。今日も綾瀬を待つてるのか？ まったくご苦労だな、戸宮セン・パイ」

彼女を下校時刻まで待つと言うのが場カツプルのすることに見えたのか、嘲笑するかのように戸宮をセンパイと呼ぶ先輩 褐色の男性、黒峰藤吾が目の前に立っていた。

「はあ？ なんですかそれ？ どこを皮肉って『センパイ！』何て言ってるんですか？ もしかして美子都の真似ですか？ それでも全然意味わかんないんですけど！」

「おいおい、そんなに怒るなって。馬鹿にしたのは悪かった、悪かったからな」

せつかく思い出した人の思考を妨害する存在の登場にムカついた戸宮の一方的な捲くし立てに気圧されたのが、藤吾は自分の非をそう詫びた。

普段は滅多なことでは謝りもしない藤吾がちょっとした冗談に言い合いで謝罪したことに驚いて、熱くなっていた戸宮の頭は冷えていった。

「あ、はい。俺も言い過ぎました。すみません」

そう言いながら頭を下げる。内心、自分は何であそこまでムカついていたのだろうか、と考える。

（美子都との思い出を邪魔されたように感じたのかな？）

一応心の中でそう結論付けて頭を上げる。すると、目の前でこの一連の戸宮の行動を不思議に思った藤吾が首を傾げていた。

「……、どうしたんですか先輩？」

「いや、怒ったり謝ったりと。お前ってそんな不思議ちゃんキャラだったかなってな。俺の見立てではよほどの事がない限り喜怒哀楽をあまり表に出さない奴だと思ってたから」

「うーん、基本はそういうスタンスなんですけどね。なんつーか少し自分でも驚いてるんですよ。さっきまでの自分はどっかおかしかつたなーって」

あえて不思議ちゃんと比喻された事には触れずに話を進める。つかさそうという表現知ってたんだこの人、っ戸宮は藤吾に対しての認識を改めた。

藤吾は目の前で頭を掻きながら「そうか」と呟くと、一瞬腑に落ちないような顔をするがすぐにいつもの険しそうで結構緩んだ表情に戻る。

「で、先輩は部活動のほうはどうしたんですか？ 空手部って時間ギリギリまで練習するって聞いてましたけど。ほら、下校開始時刻まであと五分程度ありますし」

そう尋ねられた藤吾は苦虫を噛んだ様な表情になる。

「いやな。後輩たちがついて来ないんだよ。二時間ぐらい経てば疲れ果てた連中ばかりで、道場は死屍累々。まったく、不甲斐ない連中だ」

そう藤吾は天井に目を向けながら深くため息をついた。瞬間、瞳の色を変えて目前の戸宮へ向き直る。

その動作はたとえるならば獲物を捕らえた狩人のようで、自分も不思議ちゃんじゃなか、と戸宮は若干思った。

「そこでだ、戸宮。空手部に入
「お断りします」

しつこい悪徳業者のように繰り返されてきたその問いかけに、いつもどおりに答える戸宮。

藤吾は「そうか」とちよつとしょんぼりした様子で呟いた。

藤吾としては自分の後釜として戸宮を入部させたいようなのだが、生憎戸宮は空手を含むあらゆる格闘技に興味はなく、そんなやつが部活動に参加しても他の部員の反感を買うだけ。

そんな長く語るほど考えてはいないが、それでも自分は入部しないと結論付けている。

……少し先輩が可哀相だな、と思いながらも。

「てか先輩。そんなに今年の二年生、頼りになるやつがないんですか？ 俺一度だけ先輩に連れられて練習の見学したとき、全員強そうに見えましたけど」

「ふん。強そうじゃ意味がないんだよ。例えるなら、誰にも負けない筋肉を持っている男は誰にも負けない男なのか、ということ

だ。どれだけ腕力が強かろうと扱う人間でそれは切れない物はない名刀にも、豆腐さえ満足に切れないなまくら刀にもなる。それが奴らは分かってなくてな、ただ筋肉をつける事が勝利につながると思っている」

長々と語られた藤吾の持論。要約すれば「筋肉つきたいだけならボディビルダー部でも作れバカヤロウ！」と言った感じがしっくりくると戸宮は思った。

そしてその上手に出来た戸宮の要約は、しかし披露する間も与えられず、藤吾の話はまだまだ続く。

「その点お前はいい。物事の真理を見抜く目も備わってるし、そこから辺も理解してくれる。特にお前がそこいらのやつより優れているのは綾瀬が証明してくれているからな」

「美子都が、ですか？」

戸宮は「俺がそこまで有能に見える目は結構優れていてな。お前はしたかったが、それ以上に美子都のことが気になりそんな質問をした。」

「ああ、そうだ。あの子は男を見る目は結構優れていてな。お前は同級だから知ってるだろ、三枝のことは」

「ああ、あのミスター猫かぶってる君ですね」

一年の三枝とは世間で女たらしといわれる部類で、甘いフェイスと真面目な（上っ面だけ）態度が評判の男子。

彼の恐ろしいところは交際したことのある女子の非難を拭い去るほどの人気だ。クラスでこいつの悪口を言った女子が独りぼっちになった風景などを戸宮は何度か見たことがあった。

しかし、そんな自分をも超越する真性の不真面目と、あの純真無垢な美子都の話が戸宮野中ではどうしてもつながらない。

「で、あれと美子都がどうかしたんですか？」

「ああ、それがな。」

先輩がそう言いかけた時だった。

戸宮の背後にある階段から、もの凄いスピードでなにかが駆け下

りてくる音が聞こえた。

戸宮は携帯の時刻を確認してみる。長針は下校開始時刻を二分程過ぎており、グラウンドでは運動系部活の生徒たちが片づけをはじめていた。

この時間にあんなに騒々しくしながら昇降口に向かってくる生徒を戸宮は一人しか知らない。

そしてその音を聞いた藤吾も何か感じたらしく「男女の邪魔はいけないからな」と言って足早にその場を去ってしまい、肝心の話は結局聞きそびれてしまった。

……なんて間の悪いやつだろう、戸宮は思う。

悪意のない妨害だと分かってはいるが、少しばかり悪態をついてやろうと思ひ。

そして、

「センパイ！」

戸宮がそこにいるのを確認した瞬間、満面の笑みでそう叫び駆け寄ってくる少女を見て、そんな考えはシャボン玉のように弾けて消えた。

人々が移動をし始める夕方。あるものは夜の仕事へ、あるものは食事などの準備のため、そしてあるものは家に帰るため。

真つ赤な斜陽に照らされた細い道路。そんな小型車が二台通るのが精一杯のような道の両脇には、駄菓子屋さんに呉服店。ちょっとしたスーパーや時計の売買を専門とする店など、今の時代大型のショッピングストアに完全装備で搭載されていそうな店が別々に営業していた。

そして白い線で線引きされてはいるものの、体を守るものは何一つない歩道を歩く二つの人影は、戸宮有我と綾瀬美子都。

本来、彼らの帰り道はここではなく、人の賑わいがあるファミリ―レストランなどの近くにある十字路などを渡つたりする道で、まだ夕食時には早いがここよりは人の賑わいがある。

だが二人はここを歩いている。理由は簡単。今朝の言い合いの末決まった『おいしい店』に連れて行くという義務を果たすためだ。

意外なことに、現代っ子臭のぶんぶんする戸宮の友人たちが教えしてくれた『おいしい店』とは、おばあちゃんが店員とかその他の雑務を兼任している、廃れた商店街の一角に鎮座していそうな駄菓子屋だった。

「で、その『過ぎ行く時代の物悲しさを痛感させてくれる、哀愁漂う古きよき老舗の駄菓子屋さん』は、どこにあるんですか？」

「……いや、ちょっと待て。ここら辺だ。ここら辺にあるはずなんだからそう声に怒気含ませるなって。あと俺は『哀愁漂う』の部分は言った覚えはないからな」

戸宮は苛立ちを隠しきれずにいる美子都をどうにか静め、手元の地図へ視線を下ろす。

(ここら辺にあるはず……か。そんなの分かるわけねえよな、この地図)

戸宮に落ち度はない。地図を書いてくれた友にも落ち度はない。悪いのは駄菓子屋周辺と思われる場所の地形だった。

妙に細い道ばかりで入り組んでいて、迷いそう（実はもうすでに迷っている）だ。その上店にはこれと言った看板などがないものがほとんどで、おそらく自宅兼で営業している店が多いのでそういうのを付けるのが躊躇われるのだろう。

地図にはある程度の道筋が書かれていたが、頼りにしだして五分で無意味になった。理由は簡単でこちら一体の地形が複雑すぎて地図どおり進んであったのは『杉山』とかいうおじいちゃんの家。

そんなこんなで迷子になった戸宮は、その事を美子都に感づかないよう、出来れば駄菓子屋を、せめてこちら一体からの脱出を目論んでいたのであった。

といつても当てがえないので戸宮は周りを見渡してみたりする。

そんな戸宮の行動が不審に思ったのか、美子都は怪訝そうな表情で尋ねてきた。

「センパイ！ さっきからあんまり地図見てないですけど、それで分かるんですか？ センパイどっちかって言うと方向オンチっぽいですけど」

「……大丈夫。あと少しで駄菓子屋につくから」

「ん、信用ならない態度。それに答えるときの最初の沈黙はなんでしょうか？ もー、いいです！ わたしが地図見ます！」

「あつ！ お前やめろ！ やめ」

いきなりの強襲に使い物にならない地図は戸宮の手から美子都の手に渡ってしまった。

「えーと現在位置はつと、……………えつとセンパイ？ これって地図ですよね」

「……ああ、俺の知る限りではそう分類されるけど」

「じゃ、もう一個訊きますね。こちら一体の複雑な道を、この小学生が友達に自分の家を教えるために書いたようなレベルの地図で、理解できると思いますか？」

一度勢いに乗ったら美子都はもう止まらないことを知ってる戸宮は、小さく「思えません」と呟くしかなく。

そして、

「こんの……役立たず！」

そんな結構傷つく言葉を彼女に言われながら、右頬に平べったい一撃が放たれるのを見ていることしか出来なかった。

「はあー」

重なるため息。

戸宮は両膝に手をつきながら、美子都はその場に座り込みながら、それぞれ疲れをとろうとしている。戸宮のほうは若干肩に掛けた鞆が落ちそうになっているが、気にかけている様子はない。

入り組んだ住宅街ラビンスから脱出を果たした二人の目前に広がっていたのは、片側二車線の中央分離帯まである道路。

今までの歩道と車道を区切る白線しか引かれていない道とは違うのだ。

「ここまで来るのに苦労したー。えっと今は……えっ！ もうこんな時間ですか？」

「かれこれ三十分近く歩いたもんな。それに店探すのに三十分で、合計一時間ぐらいですかね。ほら、空も暗くなってきてるし」

そう言っつて戸宮が指をさした空に太陽と呼べるものは存在せず、辺りは地平線から差し込む僅かな夕日で幾分かの明るさを保っていた。

道沿いのレストランの駐車場には何台もの乗用車が止まっており、それに比例するかのように店内は真昼の街中のように清潔な賑わいを見せていた。

これは別に微笑ましいとかそういう意味ではない。単に今が家族連れで外食するような時刻と云うことを示している。

「あーもう。センパイの所為ですからね！ こんな時間まで外を歩き回らないといけないなんて！」

「迷った原因は俺じゃなくてあの地形にあるだろ、どうかんがえても！ それに別に高校生なんだからいいだろ、少々帰宅が遅れたところぞ！」

そう戸宮が怒鳴るように言い返すと、さきほどまで威勢よく文句

を言っていた美子都はしゅんと静かになり、それだけならまだしも涙目にまでなり始めた。

戸宮自身も過ぎていく時間とここから出れるのかと言う不安に焦燥感を感じていたのだが、それでも先ほどの反論は少し言い過ぎたかなと思っただ。

彼女のなく姿を戸宮は見たくない。だから自分が悪かったと謝ろうとした時、

「……だって、遅れたらお父さんが心配するんですよ」
彼女は目頭を押さえながら、嗚咽交じりにそういった。

普通の高校生ならそれを聞けば「ファザコン？」と疑問符を浮かべるところだろう。

だが戸宮にはその言葉にどれほど懸命な思いがあるのか、願いがあのかを知っている。

ずっとあると信じて自己紹介のとき『家族』と答えて褒められた自分。そんな『家族』が信じていた母に壊された日。

元気にいつも冗談交じりの会話をしていた父。そうだった人がまるで人形のように活力をなくした日。

彼女はそう言った、大方人には話したがらないような事まで戸宮に話した。それは何故だ？

理解してほしかったから。戸宮はそう思っている。

だから、ここで彼は閉口してはいけない、決して。彼女を裏切つてはいけない。もしそうしてしまつたら　もうあの笑顔を見ることは叶わない。

「そう　だったな。よし！　じゃ、お前の家まで一緒に帰るか！」
「え？　だってそしたらセンパイ帰る時間がすごく遅く……」

「っは！　一時間やその程度大したことない。俺はそれよりお前の帰り道に何かあったりする事の方が怖いんだよ。さ、そうと決まれば行くぞ。早く帰ってお父さんを安心させないとな」

「……、」

戸宮は彼女の家へ向かう道を淡々と歩を進める。美子都はしばらく

く戸宮の変貌っぷりに目を点にして立ち尽くしていたが、

「……………」ありがとう」

そう一言ボソツと呟いて、後を追いかけて始めた。

いつのまにか夕日は完全に沈み、空には様々な星と大きく輝く月がひとつ。それはどこかいろんな装飾のされたお祝いパーティーのような雰囲気醸し出していて。

そんな空の下を二人は手を繋ぎながら歩むのだった。

現在午後九時。いかに季節が夏だとは言え、こんな時刻にもなると辺り一面真つ暗。頼りになるのは街灯と、家の窓から漏れる部屋の光だけ。

そんな心細くなるような道を、戸宮は落ち着いた表情で歩いていた。

戸宮はほんの三十分前まで美子都の家にお邪魔していた。彼女の父が、こんな遅くまで美子都の面倒を見てくれたお礼と言うことで、夕食をご馳走してくれると言ったからだ。

当然、あちこち動き回ったりで戸宮の腹の虫はぐうぐう鳴っていたのだが、それでも家族水入らずに横槍をいれるのははばかられる。そう思い、断ろうとはしたのだが……結局美子都の必死なお願ひ攻撃に負けてしまい、綾瀬家+1名で食卓を囲むことになったのだ。ただ意外なことに彼女の父が作った晩ご飯はとてもおいしく、戸宮はいつしか遠慮することを忘れ、だされていた量+ご飯一膳平らげてしまった。

その後いくらか他愛のない会話をして、戸宮は帰った。

ここで勘違いしてもらっては困るのが、戸宮は別にご飯をおなか一杯食べれたから安心している訳ではない。

単に帰り際に彼女の父に言われた「君がいるから安心して娘を送り出せるよ」と言う言葉にとてつもなく満足しているわけ。

自分は美子都やその周りの人たちの助けになっているんだという、安堵感に包まれていた。

ふと一日を振り返ってみて戸宮は思う。今日は中身の詰まった一日だったなど。

そして、こういう日の最後にはデザートと言うか大トリというか、戸宮の周囲の人間の中でも一番特徴のある奴が待ち受けている。これまで経験で戸宮はそう知っているのだ。

そして案の定と言うべきか、長かった帰路を執着地点の前でうるちよろしているソイツを見つけた。

ソイツは片手に回覧板を持って今にもインターホンを押そうとしている。

それは戸宮にとって非常に迷惑だ。戸宮家は昨今よく見受けられる親と子の間に隔たりがあるような家庭ではない。なのでこんな時刻に帰宅するところを見つかれば、もれなく二十分折檻フルコースである。

それに戸宮はソイツと話がしたい。

なのでそつと背後に忍び寄り、

「おい、奏！」

と呼び止めてみた。

するとソイツ改め奏は、驚いたのかその場で大きく飛び上がる。

それから恐る恐るこちらへ振り向き、声の主が戸宮であると分かったとたん、耳まで真っ赤に染まった。

「……………どうしたんだ、お前？ 驚いたり恥ずかしがったり」

「う、う、うるさいわよ。有がいきなり話しかけてくるから気が動転しただけ。別に……………幽霊とか思っては……………」

その文末のまさかの勘違いが戸宮のツボに入り、大爆笑。ただでさえ赤かった奏の顔はさらに紅くなり、絹のようにきめ細かい長い黒髪と合わさって、どこか宝物とか言って保管される布に包まれた宝物を連想させた。

この黙ってればいい事まで喋ってしまう正直者は相良奏。戸宮家の隣家の一人娘で、戸宮とは俗に言う幼馴染と言う関係だ。

戸宮とは小中までは一緒だったものの、高校で進路が分かれ、戸宮は成績中の上程度でいける公立高校へ、彼女は首席クラスでないといけないような私立の女子高へと進学した。

ただ先述のとおり家が近所どころか隣なので、こうたまに会っては互いの近況を話し合うのだった。

いつまでも笑う事をやめようとしない戸宮に彼女はいい加減腹が

立ってきたのか、今度は別の意味で顔を真っ赤にして反撃を開始した。

「別にそこまで笑わなくてもいいでしょ！ それにもう夜遅いんだし、そんな大声で笑ってたら近所迷惑よ」

「大丈夫大丈夫。俺とお前はここらでは礼儀正しい幼馴染で通ってるんだから。昨夜の笑い声は戸宮さんのところの息子さん？ なんて噂は広がらないよ」

「私はそういう意味で言ってるんじゃない、たとえ有だつてバレなくても周りの人に迷惑をかけてる事に代わりはないでしょ！」

「あははは。……じゃ聞くけどさ。ただ笑っているだけの俺と、大声張り上げて怒鳴っている今のお前。どっちのほうが迷惑だと思う？」

「それは……」

奏は反論できずにうつむき加減になる。

これは少し考えれば分かる。笑い声だけなら仲の良いご家庭なのねオホホホ、で済むのだが怒鳴り声は女であろうと少し野蛮な雰囲気をもっている。

なので、怒鳴り声のほうが不快レベルは高いのだが……どっちも不快なことには変わりはない。

見ての通り、口先の強さは戸宮のほうが圧倒的で、今まで何度も負かしてきている。

だが、勝ったままでは彼女が泣いてしまう。なので、戸宮はいつも完璧な勝利の後上手くフォローしてあげる。

「なんてな。どっちも迷惑なんだから、どっちもやめればいいだけの話だ。だから俺も笑うのをやめるから、お前も怒鳴るのをやめろよ」

それを聞いた彼女は今にも泣きそうな顔から、拗ねてはいるが幾分がましな表情に戻った。そして小さな声で「分かった」と呟く。

「おし、それじゃ夜も遅いし。回覧板は俺が渡しとくからな」

そう言って戸宮は彼女が持つ回覧板を頂て、足早に玄関から家に

入ろうとし、

「それはいいけど、有最近私をいじくって楽しんでるでしょ？」
そんな何気ない質問に制止された。

確かに彼女の推測は正しい。特に今日みたいな楽しかった日の最後には、彼女を茶化すのがお決まりになりつつある。

なのでそこは正直に「そうだけど？」と答える。

「ふーん。有は女の子いびって楽しいんだ……」

そう言っただけで彼女は意味ありげな笑みを浮かべ、

「これ、美子都ちゃんに言ってもいい？」

そう、当たり前のような声でチェックメイトが宣言された。

「……、」

沈黙する戸宮。それはなんと云うか、いろんな意味で困るわけ。
つまるところ、これが幼馴染言ひ合い合戦で、はじめて戸宮が敗
北した一戦となった。

幕間 1

幕間 1

話し声が、少年の耳に飛び込んできた。

楽しそうに会話をする仲のよさそうな男女の声。一人の声は言葉のスピードも声の大きさも怒った小学生みたいで、どこか幼稚。もう一人の声は静かで、しかし威圧感のある諭すような感じだ、と少年は思った。

だがそこまで考えて　なんて些細な事に自分は思考を裂いているのだと、少年は自身に対してため息をついた。

少年は本来意識を集中すべき前方の世界へ目を向けた。

紅い世界。今日の夕方、夕日に染められたであろうこの場所は、それより濃い深紅によって着色されていた。

絵の具にしては水っぽいはそれは……奇妙な形をした物体を中心に広がっている。棒のようなもの四本に加え、ボール型の物体が生えているそれは、

紛れもない、真正正銘人の死体だった。

「ああ……気持ちいいいい！」

血の匂いを嗅いで少年は歓喜する。さながら、獲物にありついたライオンのように。さながら、蛙を捕食した際の蛇のように。

ただ、ある一部分の違いのみでそれらと少年は似て非なる存在となる。

それは目的。

もちろん生存のためかどうかも、含まれる。だがそんなの瑣末な問題だ。

一般的に、ライオンや蛇は命を奪い食らう事を目的とし行動する。それに比べて、少年は命を奪った後のモノにこそ興味がある。彼ら動物にとっては気にもならないような、赤色の液体。

それが少年の行動原理であり、欲していた先にあつたもの。

別に、血が見たければ自分のもいい。現に少年の腕は、生命活動を出来る限り長続きさせると言う實際の使命を放棄し、目の前に転がっている物体を突き刺したナイフで自らさえも絶命させようとしている。

しかし それは少年の困ると言う意思に遮られていた。

理由は簡単だ。もしここで死んでしまったら、他の血液が見れなくなってしまう。

そう、犯人だということがバレてしまって、殺人のあと自殺した奇妙な人間として記録されてしまうからとか、正常な理由ではない。

否。元来、血液が見たいなどと言うモノに、まともな者などいやしない。

少年は静かに誰かも知れない死体へと、おぼつかない足取りで歩いていく。一步また一步と血の海へと侵入する。その度に水溜りを踏んだ時のような音が空気を振動させる。

そして死体を前にするとしゃがみ込み、自らが作つた傷口へと指を差し込んでいく。ぐちゅりぐちゅりと、何かがかき混ぜられるような音がする。

少年はその常人なら胃の中が空っぽになるまで吐き続けてしまつような音に、聞き入っていた。

異常。それ以外に言葉はない。どこで間違つたのか。どこでヒトの道を踏み外したのか。それを知り得ることは出来ない。

ただこれと関わつたが最後。常人は侵されていく。この混ざるような狂気に。

そう、狂気は混同する。自らの信念と。

2 / collapse in g · night mare : 1

2 / collapse in g · night mare

あの騒々しかった日から一週間が経った。

たった一週間。日にちに換算すると7日。時間に換算すると、168時間。そんな気付けば過ぎていつてしまっているような時間。変動なんてない。また同じ生活を繰り返せる。そう信じていたのに。

俺の周囲は どことなく危うい雰囲気醸し出し始めていた。

「いつてらつしゃい」

やんわりとした笑顔を俺に向ける母さん。ゆっくりと手を振りながら、玄関口で俺を見送ってくれる。

ただ、その笑顔は心の底から俺の出発送り出そうとしているものではない。やっぱり学校なんか休んでもいいって、思っているんだろ。

七月八日。汗だくになりながら登校した日だから何となく覚えてる。

……あの日、人が死んだ。それもほんの数件隣の人が。いつも目にする路地裏で。

たまに帰るのが遅くなったとき見かける、スーツが似合う会社勤めの男の人。子供が一人いて、幸福という感じが顔からも見て取れた。

いいなあ、と思っていた。俺ももう高校生だし、いつかは家庭を持ちたいと考えていた。将来のビジョンはまだ確かじゃなかったから、心のどこか一番身近だったその家族を見本にしていた。

しかし、俺の理想の家庭像は一夜にして崩れ去った。俯きながら、重い足取りで歩く未亡人を何度も見かけた。

自分にはあまり関係ないと思っただけ。それでもやりきれない気持ちになった。

それから一週間のうちに立て続けに二件。若いカップルと成人女性に殺害された。

一週間前は皆がまだ満足に目覚めてない時から中々うるさかったこの界限は、今や昼夜を問わず静寂に包まれている。

そんな事を考えながら周りを見渡していると、沈んだ表情で玄関から出てきた奏と目が合った。

「おはよう、有」

末期ガンの患者みたいなうつろな声。俺は出来る限り大きな挨拶で、彼女を元気付けようと意気込み「おはよう」と挨拶を返すものの、出た声は彼女とさして変わらなかった。

浮かない足取りでこちらへ向かってくる奏。彼女が近づいてくるにつれ、酷く現実離れたものを見るような、彼女の瞳が目についていた。

奏は近所という事もあり、亡くなった男性の奥さんと親交が深かった。ほんの少し前に聞いた話では、一緒に料理を作ったりもしたらしい。それを食べたのは亡くなった男性。

奏にとってその時間はとても楽しかったのだろう。話をするときはいつも満面の笑みを浮かべていた。

なのに……あの日からそんな笑顔は一度も見えていない。焦点の定まらない瞳が、どこかつらさの逃げ所を探している。

「じゃ、有。いこっか……」

そう蚊の鳴くような声で語りかけてくる彼女。俺は首をわずかにだが縦に振った。

あの事件以降、両方の親が話し合って二人で出来る所まで、一緒に登校並びに下校する事になった。

俺は本心を言つと断りたかった。今にも死んでしまいそうなあい

つを見る事自体嫌だったし、そんなの居心地が悪すぎる。

ただ、あいつの食べ物やねだる貧困街の子供のような目が 俺
にそれを許さなかった。

……………つくづく思う。ヒトって本当に酷いと。

あいつと俺は、死んだ男性の家族と関わっていた度合いが違った
だけ。住んでいた場所はさして変わらず、俺だって何度か話した事
ぐらいはあった。

それなのに……………悠然とそんな事を考えている俺がいる。意気消沈
とした表情でうなだれているあいつがいる。

それが、そういうものだとか分かっていても……………理解できない。

そんなもやもやとした疑問を携えながら、俺は学校に向かった。

南の空で煌々と輝く真夏の太陽。

それを眺めながら、俺は食堂までの白い廊下を歩く。

傍らに騒ぎ出すと止まらない少女を連れて。

「センパイが自分から昼食一緒に食べようって珍しい……。あー、今日傘持ってきてないのに」

「なんだそれ？ 何なんですか、その人の優しさを先人の天気予報と重ねるような言葉は。」

俺は最近物騒だからどうなのんだ、って訊こうとしただけだ」

「ふーん。……それじゃあ答えてあげますよ。ワタクシ綾瀬美子都の近況は至って安全であります。ハイ！ これでセンパイは屋上へ行つてらっしゃい！」

「ッ」

なんとも憎たらしい上目使いでこちらを見上げてくる美子都に内心舌打ちをする。多分今の俺の顔は口元ら辺が引き攣っているのだろう。

普段の俺ならここで「じゃあお言葉に甘えて」とか言つて、美子都が必死に止めるパターンに持ち込めるのだが、そんな強がり言う元気なんて今はない。

……あの事件の事。奏の事。色々な事が一気に積み掛けてきた所為だろう。最近はかなり精神疲労もたまってきた。このままでは俺も奏みたいな状態に陥るのだろうか、とまで思う。

だが俺には現実に敗北する余裕なんてない。限界まで身を削つてもいいから、立ち続けなければならぬ。

俺を頼りにする人間がいるのだから、そのために俺は 挫けられない。

しかしどんなに気張つていこうとしても、休養は必要だ。でも家のベッドで寝るなんて現状の目を向けてしまいそうなシチュエー

シヨンはなし。

こういう時は、一般的な休養では意味がない。現実なんて頭の中から消し飛ばせるぐらい、うるさい所にいれればいい。

そういう理由で、俺はこいつの横を選んだ。

と、話が大きく逸れてしまった。つまるところ、俺はこいつに反論できないのである。

「……どうしたんですか、センパイ？」

「うるさい、一々追い討ちかけんな。」

ちっ。分かった分かった。同席させてください美子

「いやいやセンパイ！ そうじゃなくて。……なんでそんなに、泣きそうな顔をしてるんですか？」

一瞬、思考が硬直した。

よくある話だ。映画とかで、ずっと貧困な暮らしをしてきた人が、ある日現状を打破した時、涙を流したりする。

それと同じ。最近友人との付き合いとか、奏との下校とかで眼前の少女とまともに会う事が出来てなかった俺は、ずっと前から知っていたはずの幸福に触れ、無意識に涙を流そうとしていたのだ。

……出来る事ならすべて話したかった。

「…… 弱みは見せられない。心配させられない。」

「 大したことじゃない。眠たかっただけだ」

そんな即席の言い訳を、

「 そうなんですか。センパイ！ いけませんよ、夜更かしは！」

お母さんみたいに注意しながら彼女は信じた。

……もし、俺が必死に心の内を隠している事を知ったら、彼女はこういう反応をとるのだろう。

純粹に、俺を信頼する彼女がいて、彼女に平然と嘘をつく俺がいる。

「センパイ！ 食堂ですよ！」

何食べます、と微笑みながら問いかけてくる彼女。

食堂には、楽しそうに会話をする生徒たちがいる。暑い中学生た

ちの要望を答えるため右往左往する、通称『食堂のおばちゃん』たちがいる。

とても活気に満ち溢れた、世界。

それなのに、俺の心は空っぽだ。

まるで食堂の誰も座っていない席みたいに抜け落ちた、何か大事なもの。

それが何なのか。考えるには、俺の心はあまりにも窮屈すぎた。

愛想なのかどうか良く分からない。本心からなのだろうと信じる事しか出来ない笑顔を向けられながら、俺は注文したカレーライスを受け取った。

トレイを両手で支えながら席へ戻る。座席は結構空いていて、そのおかげで難なくポジション確保。今は俺の向かいの席に、一足先にきつねうどんを啜る美子都がいる。

カレーを真つ白なテーブルの上に置いて、席に着く。

「センパイ、カレー好きですね。センパイ今部活動とかはいつてないんでしょ。そんなにカロリー高いもの食べて太りませんか？」

「悪いな。俺は食べても太らない体質って奴なんだ」

「えー、なんですかその特権！ その全世界の乙女たちを敵に回すような発言！ てか一名モロに傷ついたんですけど！」

「そんな知らねえ。ってかお前十分痩せてるだろ。それなのに摂取量制限して、特なんかあるのか？」

「あのねえ、察しのつかないセンパイに言つときますと、女の子ってのはリバウンドとか激しいんです！ ほんのちよつと気を抜くとすぐ体重計との激闘の日々に逆行なんですからね！」

言いたい事を言い終えたのか、美子都はこちらを睨み付けながら、きつねうどんを啜り始める。

太らないって事はエネルギー消費が激しいってことなんだけ。教えても無駄そうなので、「何見てるんですか！」と噛み付かれる前に、彼女から視線を切ってカレーを頂く。

うん……やっぱりこのカレーはおいしい。

口の中にほおばったカレーを咀嚼し尽くして、美子都の現在の「」機嫌を窺う。人間、一秒で物の好き嫌いとか変わるものだ。特に、こいつはそれが顕著に表れる。

……え？

一瞬、思考がフリーズする。だつてさっきまで美子都しかいなかった俺の視界に、筋肉ムキムキの男性が出現した。

言つまでもなく、黒峰藤吾である。

「よ、戸宮。様子を見に来てやつたぞ。……って、なんだその顔？」

「いやねえ、食堂つてこんなモンスターとエンカウトする場所だつたっけ？ 何てことを考えてるんですよ先輩」

「なんだ、モンスターとは人聞きの悪い。あーいう荒唐無稽な物と一緒にしてほしんだけどな」

えー、そういう切り替えしをしますか、先輩。

「そうですね、センパイ。黒峰先輩はどっちかっていうと、モンスターよりドーベルマンですよ」

こいつに限ってはこうだ。……なんでモンスターってここに突っ込まないかな。

そんな益体もないことを考えながら、ふと先輩の頼んだ料理を見てみると、それは……。

真っ白いお米でにぎられた、中程度の大きさのおにぎり二つだった。

「そうだぞ、戸宮。綾瀬の言う 今度は何に驚いてるんだ」

「いや。あんた、このくそ暑いエネルギー消費の著しい夏に、あのスタミナ回復料理がずらりと並んだ食堂メニューから、そんなおやつみたいなもの、選べましたね」

「……、？」

まったくもつてなんのこつちや、と不思議そうな顔をする先輩だが、俺は逆にそんな先輩が不思議だ。あながち、俺のモンスターという例えは間違っていなかったかもしれない。

「米を舐めるな、戸宮。栄養価も高いし、そもそも米は日本人の主食だぞ。パンだ牛乳だと、そんなくだらん洋食文化に汚染されず、米に魚に味噌汁お茶、っていうのが日本人には最も適してるんだ」

「すごい！ 黒峰先輩つてなんていうか、肉食獣っていうイメージだったんですけど、印象が変わりました！」

驚きからか喚起するバカは放つて置いて、俺は先輩の掛け値なしの肉体を確認する。

「んっ？ 今度は何だ、戸宮。いちいちそんな反応、しつこいぞ。そんなに構って欲しいのか？」

「孤独に耐え切れず俺たち追って食堂まで来た自称『一匹狼』に言われたくないですよ。 ってそんな事どうでもいいんだ。あんた、本当に肉類牛乳摂取してないの？」

惚けた顔でそうだ、と頷く目の前のモンスター撤回して修行僧。

ただでさえジャンクフード大好き寿命が縮むなんて関係ナツシング！ な俺たちからすればそんな精進料理じみた食事を年中しているなんて正気の沙汰じゃない。……まあ、そんな事を言ったら平気で寿命削ってる俺たちも正気じゃないって言われるかもしれないけど。

その後はもう、騒がしい事ありやしない。周囲の目も憚らず、俺たち三人は散々騒いだ、騒ぎ続けた！

……それが。ほんの十数分だったけど、たまらなく嬉しかった。ずっと、この場所はあると思ってた。

実際には とんでもなくバカな勘違いだとも知らずに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9299g/>

混同する狂気

2010年11月18日09時30分発行